

父親に今、改めて目を向ける

「家族を一つの単位としてとらえる」という考え方方が広まり、かなりの月日が経ちました¹⁾。一方で、私たちがあえて家族のなかでも“父親”に焦点を当てることは、日常のなかではあまり多くないのではないかでしょうか。本特集では、家族を構成する重要な存在の一人である“父親”に光を当て、父親のもつ相互作用性を組み込んだこどもと家族中心のケアの実践について考える機会にしたいと考えています。

父親の姿、役割はそのこどもとの関係やその家族のあり方によって、その家族それぞれに形作られます。したがって、“父親”にアプローチすることが、そのまま“父親へのケア”であるといえるのか、また、そこで生じている事象が“父親であること”に由来するものなのかは、立ち止まって考える必要があります。

それでも、近年の社会的変化は、父親像が新たに描き直される契機となっていることは間違ひありません。入院するこどもに付き添う父親、あるいは外来の待合室でこどもと過ごす父親など、父親の家族役割がより柔軟になり、医療における父親の存在も確かに変わりつつあります。2012年に本誌で父親特集²⁾が組まれてから14年、その間に、就労面ではコロナ禍を経て在宅勤務やオンラインミーティングが浸透し、育児面では2022年10月から出生時育児休業(いわゆる「産後パパ育休」)が制度化され、さらに2025年4月からは出生後休業支援給付金の制度も始まりました。さらに、在宅で医療的ケアを受けながら生活するこどもが増えたことも、父親との直接的なかかわりをより日常的なものにしているかもしれません。社会が変化するなかで、父親に関して“変わりつつあるもの”，そのなかでも“変わらずに存在し続けているもの”，その双方が、いま改めて問いかれてています。

2016年にアメリカ小児科学会は、父親の積極的な関与がこどもにもたらすメリットや、父親のこどもへの積極的な関与を支援する医療従事者の役割を明確にしました³⁾。そこでは、医療者がこどもや家族に対する

父親の関与を橋渡しすることで、こどもと家族のアウトカムに大きな影響をもたらすと述べています。父親支援には、父親個人“への”ケアに留まらず、父親とこども、あるいは母親を“つなぐ”ケア、さらには父親を含めた“家族全体を視野に入れた”ケア、こどもの最善を“父親と共に”考えていくケアと、多層的な意味合いが含まれます。私たちが父親を知り、アプローチを図ることが、こどもと家族へのより豊かでダイナミックな相互作用をもたらすきっかけになるのです。

本特集の前半では、家族の発達や、父親の子育て・就労に関する社会的な側面から、父親の存在と父親をめぐる状況を概観します。そして、なかなか可視化することが難しい父親へのケアの実践を、病院や地域をはじめさまざまなフィールドで活躍する看護職の皆様から共有いただきます。さらに、父親の皆様からも寄稿いただき、お子さんの医療経験を通した父親からの視点に触れる機会を得ることができました。

本特集が、皆様の父親を含めたこどもと家族へのケアを、さらに一歩前進させていくための糸口となることを願っています。

●文 献 ●

- 1) 中野綾美：看護はなぜ家族を一単位として考えるのか；家族看護の目的と役割. 小児看護 16(4) : 410-414, 1993.
- 2) 丸光恵・編：小児看護における父親へのアプローチ. 小児看護 35(10), 2012.
- 3) Yogman M, Garfield CF ; Committee on Psychosocial Aspects of Child and Family Health : Fathers' roles in the care and development of their children : The role of pediatricians. Pediatrics 138(1) : e20161128, 2016.

順天堂大学大学院医療看護学研究科准教授

入江 亘
Irie Wataru